

浄土

九月號

目次

表紙・卷頭カット……牧野 醇

たゞ一向に……

江藤 澈英(卷頭)

一期一會……

吉田 絃二郎(一)

少年工は訓ふ……

糸山 天真(四)

黒蛇物語(印度の傳説)……

池田 罔基(二四)

手帖(書の話)……

子母澤 寛(一〇)

信仰相談……(二三)

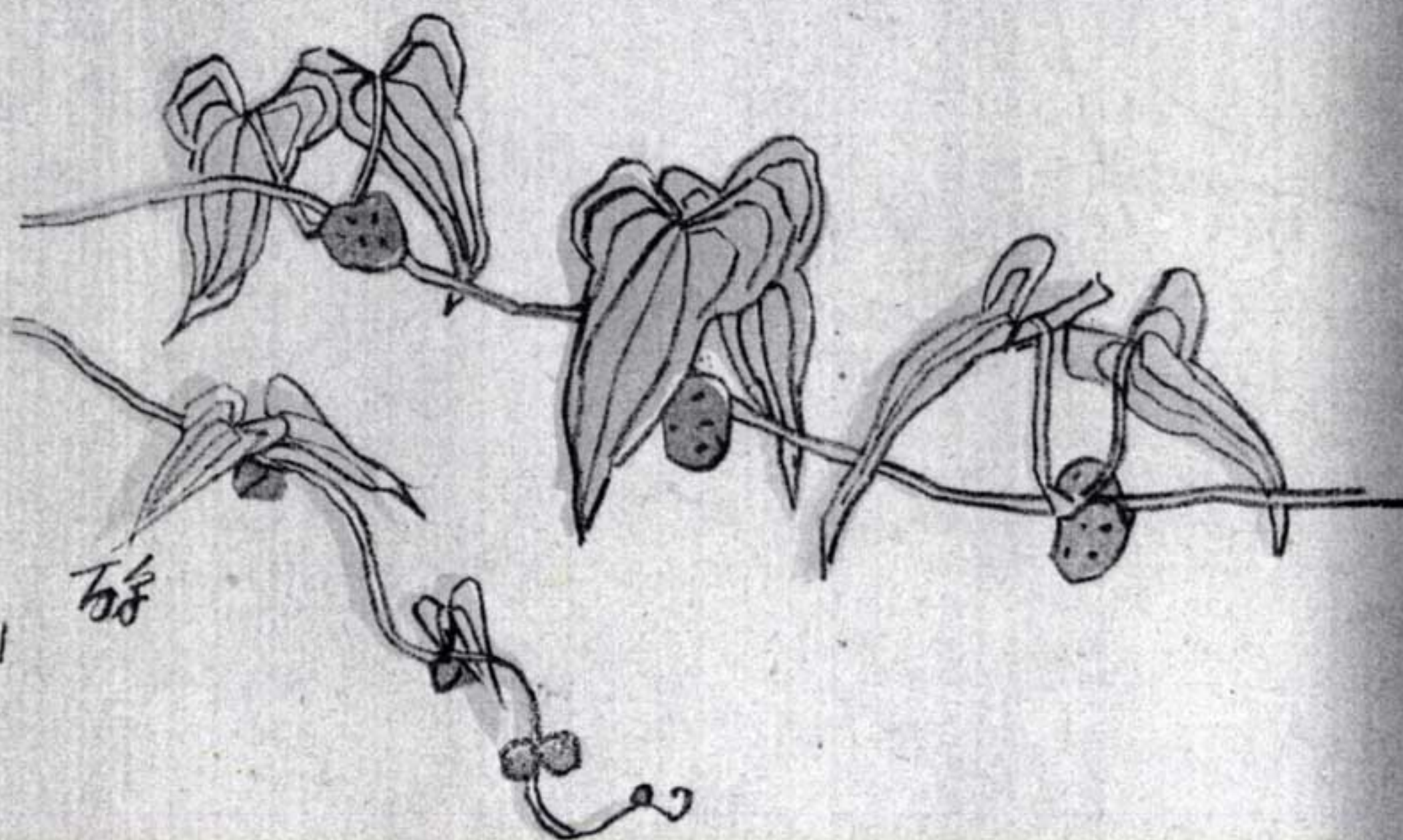
歌 壇……岩野喜久代選(一七)

俳 壇……太田耳動子選(一七)

一切を助業とし結縁せん……

中村 辨庚(八)

編輯後記……(一八)





ただ一向に 江藤 澈英

凡そ一事を成就するには不斷の努力と非常の熱誠と幾多の忍苦を必要とする
ことは云ふ迄もない。殊に大東亞聖戰の完遂といふやうな大事に至つては、眞
に一億國民のいたむきな努力が必勝の一匙に集結されねばならぬ。

法然上人は極樂に往生するためには「たゞ一向に念佛すべし」と訓へられた。
無量壽經には「一向專念無量壽佛」と説かれ、阿彌陀經には「一心不乱」とあ
り、善導大師は觀經疏に「一心專念、彌陀名號、行住坐臥、不間時節久近、念
々不捨者、是名正定之業、順彼佛願故」と釋されてゐるが、宗祖はこの御文に
依り淨土一宗を開闡せられたのである。

宗祖の淨土開宗に至る途には、觀山三十年の研學と鐵行、そこには黒谷の隱
棲、清涼寺の參詣、名匠の應訪、報恩藏經の開闡等一向專心な求法の姿が拜さ
れるが、更に開宗の後には日課稱名六萬遍の精勵、吉水藏房の説法、三帝の戒
師、四國遠流など自行化他共にひたむきな爲法献身の御生涯であつた。皇國
佛教の精華たる淨土の宗門が開かれるまでには、こうした上人のたゞ一向な努
力と非常な熱誠と幾多の忍苦に依て培はれてゐる。

世界の平和を樹立し人類の幸福を招来しやうといふ今次の聖戰は、まことに
曠古の大業で並大抵のことである筈はない。一億國民の大和協力に依て、たゞ
一向に必勝への一路が精進されねばならず、しかも非常なる熱誠と忍終不悔の
覺悟が緊要である。

われ等淨土念佛の教徒は、今こそ數百年來教へ導かれて來た淨土の信念を基
調として、たゞ一向に聖戰目的を完遂すべく滅私挺身の實を示すべき秋に直面
してゐる。



一期一會

吉田 絃二郎

昨日、わたくしは武藏野を歩いて見た。そしていつの間にか栗の實が大きくなつてゐるのを發見して、今更のごとく秋を感じないではをられなかつた。

「秋が來たのだ！」わたくしは自分の心に言ひ聞かせるやうにして、いつまでもなつかしい枝頭の栗の實に見入つてゐた。

わたくしはこのころのあわたししい自分の心を顧みる氣にもなつた。

自然はいつも落ちついてゐる。いつも靜かである。梢に囀つてゐる小禽も昔のまゝである。足もとに咲いてゐる小草の花も昔のまゝである。すでに野菊も咲いてゐる。何も彼も昔のまゝの秋である。わたくし自身の心だけがやゝもすれば秋をも忘れようとしてゐる。

四五日前のことであつた。わたくしは武藏野を歩いてゐた。十五夜の月が圓々として、玉蜀黍畑の上にのぼつて來た。わたくしは三十幾年前に、友人と二人で武藏野を歩い

てゐて、多摩の河原をへだてゝ上る名月を眺めたことを思ひ出した。友はそれから數年後、軍人の責任感から腹を切つて死んだ。かれは世に稀な尊敬すべき武人であつた。

或る大實業家の當主が未成年者だつたので、同郷の關係から、かれは後見人を委託された。そして當主が成年に達して、かれの後見役が了へた時、實業家の親族共は相當額の金錢をかれに贈つた。かれはその金をそつくり新聞紙に包んで、實業家の玄關に放り込んで、生涯その家を訪れることをしなかつた。

もしかかれが今日まで生きてゐてくれたら、大陸の戦野に活躍してくれたであらうに。

わたくしは玉蜀黍畑の上の月を眺めつゝ、友人のことを思ひ出してゐた。その刹那、警戒警報のサイレンが鳴り出したので、急いで家に歸つて行つた。その後數晝夜わたくしの頭はふたゝび現實の苛烈な戦況に對する一喜一憂の渦に埋められてゐた。

その落ちつきを失つたやうなわたくしの心が、武蔵野の
雑木林に可憐な栗の實を見出した刹那、楚々たる野菊を見
出した刹那、かつての靜心を取りもどしたのであつた。

歩一步武蔵野をたどりつゝわたくしはしみじみと日本の
秋の美しさ、日本の秋の尊さを感じないわけにはゆかなか
つた。この美しい日本、尊い日本の自然、たとひ一步たり
とも米虜軍に蹂躪らせてはならぬ。一莖の野菊に對して佇
立してゐる間に、わたくしは胸の疼くのを感じた。

美しき祖國、尊ぶべき祖國の自然に對してかくまで深い
愛着を感じたことが、かつてあつたであらうか。

この美しき、尊き祖國斷じて護持しなければならぬ。

人は物量の尊さを言ふ。物量の尊さを知ればこそわれ等
も物量の戦ひに懸命である。しかし精神をこめられた物量
にしてはじめて敵を撃つ力を持つ。戦線に送られた飛行
機の發動機には日本人の魂がこめられてゐなければなら
ぬ筈である。もしたゞ一つの發動機に魂の代りに古雑巾
が投げこまれてあつたとしたら何うであらう。

魂なき物量は何の役にも立たない。

もし一本の捻子を切るにしても、神を念じつゝ、念佛を
唱へつゝ、手を動かすほどの心を以てするならば千機の飛
行機千機が完全な戦力となるであらう。雑念によりて掻き

みだされた手からは眞の科學的物量は生まれない。

一番大切なものは精神である。物量には時として一步立
ち遅れても、間もなく敵を追ひ越すすべもある。精神に立
ち遅れがあつては追ひつくすべもない。

昨今のやうな時勢には國民は指導者の指揮棒一つに頼つ
てゐる。指導者たる者は確乎たる精神力と愛情を持つてゐ
なければならぬ。

昔、武田家の勇士甘梨藤藏は、戦場に於いて、組内の何
某が深手を負ひ、血が止まらないので、傷の妙藥といはれ
る蘆毛馬の糞を水に入れて飲ませようとしたが、何某は「命
惜しとて馬糞を呑むべしや」と言ふ。そこで藤藏は「天晴
れ勇士の言なるかな。されど大事の戦場なり、生き存らへ
て御奉公致すべきぞ」と言ひ聞かせ、先づ自ら馬糞を飲ん
で見せたので、家來何某も主君の情に感じて馬糞を飲み、
ふたゝび戦場を馳驅する身となつた。寔にありがたい甘梨
が心懸けである。

部下にのみ馬糞を飲ませてはならぬ。上に立つ者が甘梨
ほどの確乎たる意志と母のごときやさしい心を持つてゐれ
ば、下の者はよろこんで馬糞も呑む。

「山寺にかき籠りて佛に仕奉ること徒然も無く心の濁も清

まる心地すれ」(徒然草)

今の世の生活とはおほよそ對蹠的な考へ方であるが、實は第二次海軍特別攻撃隊の勇士の心境もこゝに在つた。國難に殉ずる若武者たちは從容として茶を點て、戰場に臨んだ。軍機部長加藤少將は夜更けてたゞ獨り、戦死せる部下の冥福を合掌祈念してゐた。心だに澄徹せば戰場も亦山寺である。

「唐土に許由といひつる人は更に身に隨へる賸へも無くて水をも手してさうげて飲みけるを見て、なりひさごとといふ物を人の得させたりければ、或時木の枝に懸けたりけれど風に吹かれて鳴りけるを嗤ましとて捨てつ。又手に掬びてぞ水も飲みける。(徒然草)」

許由に似た物語は唐土よりも日本の方に更に多い。古來日本人は物慾に對して極めて淡如たるものがあつた。殊に近世に至つて心ある俳人たちの生活はむしろ乞丐のそれに近いものであつた。近江の義仲寺の芭蕉翁の墓から、さらに數丁へたてた竹藪の下に十數基の俳人たちの墓を見た人たちは、餘りにその墓の小さいのに驚いたであらう。そこには隻手で持ち上げられるほどの墓が列んでゐる。墓といはんよりも石塊といふべきものである。嵯峨の落柿舎の裏の竹藪の中には去來の墓があるが、これも實に小さい。隻手で抱へることが出来る。生前のかれ等の生活も想像され

る。

かつて丈艸が破れ布團にくるまつて寝てゐるのを氣の毒がつて、新らしい布團を丈艸に贈つた人があつた。數日後丈艸を訪うて見ると、丈艸はやはり破れ布團一枚にくるまつて寝てゐた。新らしい布團は乞丐に與へてしまつたのであつた。

これと同じ話は桃水和尚にもある。

西行、芭蕉、白隱禪師、良寛和尚……と算へ切れないほど恬淡無慾の人たちが日本には多い。

今の世こそ最も無慾な人が必要な時代である。南洲翁のやうに名も金も地位も望まぬ人が待ち望まれる時代である。金や名を欲しがらる重役はゐないか。金を欲しがらる商人や工人や農人や指導者はゐないか。日本人全體が白隱禪師や良寛和尚や西郷南洲翁の心にさへなればこの戦さは必ず勝つ。

甘梨藤藏のやうに自分から先づ馬糞を口にする底の指導者と、物慾を棄てた人々がなければ國難は去らぬ。

今の世ほど一期一會のこゝろを深くしみじみと感じさしていたゞく時節はない。ありがたい世に生まれ合せたものである。このありがたい千載一遇の世に在りながら、大西海軍中將をして「國亡びて何の商法ぞ」と歎せしめた重役共の存在は常識を以ては判斷できない。

少年は工訓



揭示場に

置き手紙

「懐しの故郷にも歸らず、ドイツと辛抱してゐる寮生を想ふと、寮長は一擲の涙無きを得ない、君達の生活に少しでも、ゆとり、慰めを與える事が出来たらばと、半公用の休暇をとつたわけだから、氣兼ねなく寮長宅へ泊りに來い。寮生活と違つた家庭的な雰圍氣が君達を暖かく包んで呉れる事だらう。平素、叱咤や訓育の時は、やかましいが、そりいつでも、こわい寮長でも無いよ。家へ歸れば、やつぱり人並に優しいお父さんだ。角力をとつても、柔道やつても、頑張つてばかりゐては案も角力もとれない、投げつ投られつする處に技術の進歩

があり、人生の面白さが有る。

人の親切は素直に受入れる事だ、遠慮無く吾が家に歸る積りで寮長の自宅にやつて來い、兄が、吾が子が歸つて來るのを心待ちに待つてゐる様に、家中大手を擲げて待つてゐる事だらう。

來たい者は小倉さん（常務の書記さん）に歸んであるから、明日午前中小倉さんと一緒に來い、みんな何と云つても身體が大切、これから益々暑くなるばかりだから、いつも云ふ通り變な事をせぬ様に。微力なる寮長

親愛なる寮生諸君へ

こんな手紙を寮の披露場の揭示場に貼つて、凛然と振り出し振りて我が家へ歸つた。

寮生を家へ連れて來て一遍ゆつくりくつろがさせてやり度いと寮長が箱の中身の詰り云つてゐたので、秘の姿を見るなり妻はいきなり「寮生はどうなさいました？」と聞いた。秘はきまりが悪い思ひがしたのでこゝろ答へた。「うん、たつた一人だけだが來るよ。子供に信用が無いからさ、夫も明日來る事になつてゐる、數の少ない方が却つて手數がかゝらなくつて始末が好い。次期期と同一年だから夜は一様に寝かしてやるさ」と

叱咤の時、可哀想に思つて寮長の處へ泊り込みで遊びに來いと何度繰返し云つても、さつぱり希望者が出來て來ない、半ば自分の氣持が通じないのだといふ、いらだたしい情けなさがかみあがる。

家に歸つた秘は自分の服を捨てる様にぬぐと、御木寮長に挨拶のおつとめする勇氣も無く、大喧嘩の聲の上にゴロリと横になつてしまつた。すると、逆氣が付かなかつた期、の鳴く聲が急に耳に響いて來る。遠慮からの涼風がそよそよと我類を心持よく撫でる。やつと自分の身體になつた様な氣がしてホット一息つくので有つた。

親の心子知らずか

代用品の嘆き一入

振り返つて良く考へて見ると、恐ろしいもので、親の代用品と自任してはゐたが、代用品は何處迄も代用品で有つたのだ。寮長の處へ泊りに來いと云つたつて、先方は泊り込んでまで絞られちや、たまつたもんぢやないと思つてゐるのかも知らないとも思つた、成る程そうかも知れない、目惚れでも母親代りの優しい寮長と心掛け乍らも、いつの間にか、やかましい寮長に

なり切つてゐた自分である。

「黙呼」はもり／＼と、嚴肅なる聲令、端嚴なる不動の姿勢、はつきりした明快なる男性的な態度、ボタン一つハズしてゐても一々注意をする。黙呼に出ぬ者は、寮の名物では無いが、其こそ風潰しに呼び出し、或は室を訪ねて理由を問ひ訊す。病氣で寝てゐるものは、どし／＼醫者に診て貰ふ様注意を促がす。只漫然と寝て診察を嫌がる者には一緒に醫者の家に連れて行くか、擔ぎ込みまでやる。休ませ置く無いは無い、病氣を重くさせないやうに早く醫者にみせて置くすませる度いからだ。人間には氣分がすゝまぬ事がある、嫌々ながら仕事する時はきつと怪我をする、そんな時は正直にさへ云つて呉れ、ば休んでも私は何とも云は無い。時勢だから仕方が無いとか、要領良く出来る丈身體を樂にし様とする憚意心を只唾棄し度いのだ。住來で會つて敬禮をしない者、ポケットに手を入れて歩いてゐる者、盡く體を覺えてゐて、黙呼の時一々名前を呼び上げて注意をする。寮生をいぢめるのが目的では無いが、敬ひの心を人からとつてしまつたら全く無味乾燥な動物の世界に追ひやつて仕舞ふからだ。だから寮生も、うつかり往來を歩いてゐられないらしく、

出動時に僕の體を見ると、こいつはいかんと寮生が、あはて、横道にそれてしまふ事を屢々見受ける、餘計なおせっかいかも知れないが、三年経つと兵隊さんになつた時、間ごつかない、又空襲の折、規律ある訓練、結束力ある團體生活が、如何に人命の危害を少くせしめるかを考慮して、昔やつた軍隊生活が本能的に蘇つたのである。

全國から腕白の集り

二階からのわか雨

初め、此の寮生活が北は北海道の果から、南は奄美大島、沖縄と遙か遠くから、暖かき兩親の膝下を離れて、此の寮にたどりついた時には、ほんとに可哀想な氣がした。織成訓育には多少の經驗を持つ私ではあつたけれど、夫處では無い、此の子達の親の代用品になれば夫で自分の使命は充分足りる事だと心秘かに考へてゐたのだが、夫が亦どうしたと云ふ事であらう。

黙つて見てゐると……
蒲團の上で角力をとつてゐるのだらう音はしないが、下の方の室に居ると、電燈がゆれる、ごみは落ちて来る、丸で地震にでも遭つたかの様だ。物乾しの無い寮だから、それをいゝ幸ひ

に、乾物にかこつけて屋根の上をあちこちと馳足で散歩する。御蔭で階下は雨がジャン／＼漏る。全部とは云はずとも何しろ百名からの寮生だから一割としてもたまらない。窓外を不圖見ると垣根をいつの間にか旨く壊して、其處から安直に出動遊ばす、便所は少く、寮生は多勢、朝になると、あはて、擲弾投下やるとのだから、バナ、の、くづれた様なのが雪隠の後方二三寸の處へ、あちこち。夜黙呼をとらうとすると階下は全部眞暗、電燈をつけッーと云ふと「電球が無くてつきません」つかぬ等、電燈の切れたのを叱られるとでも思つたか、斷るのが面倒と思つたか、廊下の電燈をとつて自分の室につけて、空き球はチャーンと裏の空地



命を懸けて國恩に報ず

糸山天真

腕白盛なり寮生の叫び

に投げ棄てゝある。

夜は小雨でも降つたのかしらとしんみりした
 氣持になつてゐると、二階から時ならぬ俄か
 雨。朝點呼をとれば、未だ寝てゐるものあり、
 ゆつくり顔を洗つてゐる者あり、先きに便所の
 混むのを見越して、起きるが否や廊に飛び込む
 者あり、相當の時間を要した事で有つたが、今
 では百名に餘る寮生が點呼となると皆何はさて
 おいても、ガバツと跳ね起き、馳足で全員集合、
 遅くて五分、早くて三分とかゝらない見事さ
 だ。自分乍ら思ふと眞に隔世の感がある。ため
 るならば若木の内、小さい時は殊に膝が肝腎だ
 と思ふ。

然し寮の設備は不完全ながら、寮生は此處
 迄、素直に良くついて来て呉れたと感激すると
 共に、寮生の甘える心、寮長に對する氣安さを
 すつかり失はしてしまつたかと思ふと、何と無
 く處ろな淋しさを覺えるので有つた。

一ヶ中隊の御入來

耕作が一番の感激

その翌る朝、末の子を抱いて庭を散歩してゐ
 ると、元氣な子供の號令が聞える。「中里寮中隊
 十五名只今到着」とそろ／＼やつて來て私を吃

驚さした。

やつぱり來たいには來たかつたけど、何と無
 く、云ひ出す隙が無く、遠慮勝ちで有つたの
 が、私の書き遣した手紙を讀み返して來る氣に
 なつたらしいのである。全員素裸にして着湯を
 沸かして先づ着衣の眞征伐、直ちに風呂を沸か
 して入浴させる、あてにしなければならぬお客
 に、あはて、座蒲團を澤山並べて寢具の代りに
 するやら、蚊帳をあちこちと探し出すやら、飯
 食物が無い、調味料が無いので、家の者に郊外
 にある種家知人に事情を話して野菜の融通を受
 ける。不斷まるで御無沙汰してゐる丈けに融通
 心配して貰ふ其の間の悪さ。おせがきが毎日續
 いた様な大變な騒ぎ、寮生が十五人、寺族が十
 二人都合三十人ばかりの賄で寮所は寮調理場
 の出張所が出來た様な寸法、寮を出る時、調理
 人に「先生も随分お道樂ですな」と冷かされた
 事を不圖思ひ出して苦笑した事であつた。

朝お勤めを済ますと庫裡の掃除を終つた後
 は、朝から紙芝居、五目並べ、神宮プールで水
 泳、映畫、寄席と休暇中は毎日夢の様に一縷に
 暮らしてしまつた。飽きてもと思つて、寺の境
 内の一隅に有る畑を手傳つて貰つたら、思ひ掛
 け無く、之がとても悦ばれた。

「家にゐた時の様に畑を耕した時は、ほんとに
 嬉しかつた、東京に來て働いても、僕等田舎の
 者は農業せんにやならない、僕は尙更長男であ
 るから一生農業で暮らさなければならぬ。四
 ヶ月の長い間畑も耕さず工場ばかりで働いて
 ゐたから農業は忘れ勝ち、幸ひにも五日間の休
 暇の中に畑をつかんで畑を耕した時、故郷の
 農業の事を想ひ出し、ほんとに寮長さんとこへ
 來てよかつた」と加江寮生は述懐する。

海、宮城、伊佐、西原、他の寮生も口を揃へ
 て云ふ。「農業をしてゐると故郷で、お父さんや
 お母さんとやつてゐた昔が偲ばれて懐しい、ど
 うぞ、もつとやらして下さい。」とは、笑んで語
 るのだつた。

映畫も寄席も水泳も、樂しき一時には違ひ無
 かつたかも知れないが、農耕地を手傳つて貰つ
 て、鋤を久し振りで握り土の香を嗅ぐ事に依つ
 て夫が何よりの悦びであり、故郷を偲ぶすが
 となつてゐるのも、眞にいぢらしき限りである。
 點呼もとらず、毎日朝風呂に入れて、ゆつた
 りさせて、共に五目ならべをしたり、故郷の
 思ひ出に耽つてゐる内に何と無く氣にゆるみ
 が出て、黙りこくつてゐた寮生達もやつとのん
 びりしたのであらうか、次ぎから次と語り出し、

流石無口の奥里寮生も、しんみりした口調で御國訛りを混え乍らボツ／＼人の語につられて口を開くのだつた。

休んではお國にすまぬ

働いて仇はきつとうつ

「先生、私達は會社から休暇を買つて寮長さん

皇國の興廢今日にあり

けふの十歳は半年後の百歳にまさり、けふの百歳は一年後の千歳にまさる。一言の不平不満はわれらを亡ぼし、一刻の懈怠は子孫を奈落につきおとす。只今の苦しみの中には大なる歡びを孕む。この精進は子孫の繁榮を約してゐる。

畏くも、天皇陛下御みづから「戦局危急皇國ノ興廢關ツテ今日ニ在リ」とのたまひ給ふ。ただ奮激の血をかきたてられるばかりである。

道が峻しければ峻しいだけ、辛苦が積もれば積る程、それを通して打ち勝つた後の皇國の隆盛は期して待つべきものがある。他國すらあれだけの頑張りを發揮してゐる。われわれはそれ以上にねばり強く最後まで勝ち残つてゆくのである。

の家に来た、私達は家へも歸れないので寮長さんは氣の毒に想つて、わざ／＼寮長さんとこへ連れて来て下さつた、私達は國家に對して濟まないと思ふ。私達は會社に出たら、一生懸命働き、國家の爲に盡す覚悟です、八月一日に来たが、映画や寄席を見せて貰つたりした、二日目には農業をやつて歸りかつた、今は國家は勝つか負けるかの戦争をやつてゐます、私達は、こんな時節であり乍ら、休暇迄貰つて私達は大量有難く思ひます。休暇を了へて會社に出たら死ぬを投げ打つて一生懸命にお國の爲に働きたいと思ひます、サイパン島が玉碎したのも私達産業職士の働き振りが足り無いから、あんな事になつたんだらうと思ひます。

私達産業職士は一生懸命に働き、サイパン島の仇を打つてやらうと思ひました、私達は大量親切な寮長先生を戴き、枕當に仕合せです、私達は國家の爲、亦は寮長さんの爲に死んでも盡さうと思ふ」と語り終つた時、私は夫を聞き乍ら、こらへにこらへてゐた感激が胸に迫つて思はず熱い物が止めど無く頬を傳はつて流れるのだつた。宮里寮生は夫を受け次ぐ様に「私も遠く沖縄から工場に働きに来たのです、東京は大変良い處と聞いて憧んで、危い海を乗り越えて

來たのです、東京は食が少いと聞いたが、來て見ると食は少い、けれど食が少いと不平を云ふのはサイパンや大宮島の兵隊さんを思つたら云へませんねえ先生、日本の國民が食が少いと云ふと日本の國はどうなる事でせう。働いてもぜずにこんな御馳走になつて、幾日も飲まず喰はずにゐる兵隊さんに濟まぬと思ひます、先生喰べ物の心配はしないで下さい。」と之も少年らしく心配相に語るのだつた。

父思戀しい年頃に命を懸けて國恩に報ゆべく働かんとする千歳……。喰べたい盛りを前線に歸る兵隊さんの身に走らせて、ドイツと歯をくしりして我慢する少年達、休暇を貰つて、御國に相濟まぬと詫びる小さき寮生達、嗚呼!! 何と云ふ、いぢらしい健氣さであらうか、おんぶした子に教へられる。吾々は、どうかすると、働いても、こんなにお國に盡してゐると、うつかりすると思ひ上る事が無いであらうか。何事も素直に受入れる純心な少年達の想ひつめた心算を思ひ浮べる時、吾々の方が却つて學ぶべき點の數々ある事を深く反省せしめられてゐるものである。(筆者、住友通信工業株式會社所屬中里寮々長兼中正寮々長)



一切を助業として結縁せん

——法然上人法語解説(其二三)——

中村 辨 康

法語

問ふて曰く餘佛餘經につきて善を修せん人に、結縁助成し候はんことば修行と申し候べきか。答ふ。わがこゝろ彌陀ほとけの本願に乘じ決定往生の信をとるうへには、他の善根に結縁助成せんことは全く難行になるべからず。わが往生の助業となるべきものなり。他の善根を随喜讃嘆せよと釋し給へるをもてこゝろ得べきことなり。(十二問答——法語抄三二九)

解説

業とし申しますと、何となく「業が深い」とか「業つくばり」とか云ふ言葉があるやうに、悪いことのみに取られ易いのですが、決して悪いことばかりが業ではありません。唯だ「一人一日の中八億四千の念あり、念々の中の所作みな是三塗の業なり」と云ふわけから善業や正業は少く寧ろ殆んどと言つてよい程貪欲瞋恚愚痴の心からなすしわざであります爲にすべてを「悪業」ときめこんでしまつたのであります。然しそれでは私達人間も全く立つ瀬がありません。

一體「業」には身體でなす仕事と、口で言ふ言葉と、心で思ふといふと三通りあります。

身業——表業——意業——無表業

右の内では一般に「身業」が尊ばれて居ります。昔から「言ふは易く行ふは難し」とも言ひましたし、また「言行一致」の人を尊んでも居ります。誠にこもつとも次第で異論の餘地はありませんが、然し外に賢善精進の相を現じて内虚假なるものがないとは言へません。イヤ本當に反省して見て内虚假ならざるものが世間にあるでありませうか聖徳太子様でさへ「世間假虚唯佛是真」と言はれました。誠に人間の心は弱いものであります。幸に境遇がよかつたなら、その人は幸せ者であります。自分の弱さに氣もつかずに一生を終ることが出来るからであります。

とは言へ、本當には「幸せ者」と言はれ得る人もありません。何かしらその人相應に悲しいこともあり苦しいこ

ともありなさないこともありませう。

世の中と云ふものは一方によければ一方に悪いものです。それゆへにこそ賢善精進の相もあり罪惡愚痴の姿もあるのではないでせうか。皆な生きんとするものがきの變形ではないでせうか。何れにせよ。身業の外部表現だけで正確に其の人を批判出来ない場合もあらうかと存じます。

この重んぜられる身業に反して口業は多く軽く見られて居ります。然しながら「口は禍ひの門」であるやうに「口」に依つて良くもなり悪くもなります。されば宣傳と云ふことも馬鹿には出来ないものであります。この故にこそ淨土教では「口稱の一行」が大切となつて居るのです。

第三の「意業」は無表業であるだけに仕末の悪いものです。即ち「表裏相應」しない場合がいくらかもあるからであります。コロリと口先でたまされる場合も多いからであります。出来るならば「三業相應」したいものであります。それでなければ「ほんもの」ではありません。念佛稱名の行も結局は三業相應にならねば嘘であります。

心には常に佛を念じ、態度に敬虔を失はず、口には稱名を絶やさないと云ふ「三業相應の念佛」こそ最も理想的な念佛であります。

御法語に「妄念餘念をも顧みず唯だ口に名號を唱へよ。もし能く稱名すれば佛名の徳として妄念自ら止み三業自

ら調ひて三心現起し三心成就す」とありますが、三業の醇熟こそ念佛の理想境であり人生の理想態度であります。

この爲には私達日常の行爲を悉く念佛の爲の助業としなくてはなりません。如來の大御命たる「無量壽光」の増益の爲に、この愚かなる私の一舉手一投足を捧げて行く氣持こそ、三業相應してそのまゝなる職域の奉公であり、國家への忠誠となり行くものと信じます。

この信に立つ時、自他の行爲の中、世の爲國の爲になる一切の善事は悉く如來壽光の業たるものと存じます。されば之れに隨喜し之れに助成し之れに結縁し之れを讃嘆すべきは當然のことであります。私達の壽命は何の位生きる

ものでもありません。たつた五十年か七十年であります。それも半分は寝るのであり、あとの半分の半分も子供時代修養時代老衰時代でありますから、正味としては十年か二十年かのいのちであります。この尊い命をつまらない雑行に費消してしまふことは誠に残念でございます。私達の凡ては大東亞戦争を勝抜くための助業でなくてはなりません。さもなければ皆な不忠の臣であり不信の輩であります。そんなものが信仰でござれ職域奉公でござれなどと言つたところではみなうそであります。願くは私の一切を捧げて行きたいものです。願くは生活の一切を助業として他の善事をも隨喜し讃嘆し助成し結縁したいものであります。

手帖

書の話



澤母子寛

が秘の書よりは繪の方をお望みなさるかといつて、流石に鑑賞の様子だつたといふことである。

海屋の繪も決して當人のいふ如くい加減のものではなくなく、立派であるが、書に至つては正しく神品に相違ないと思ふ。

しかし、海屋の生前は、その名今日の如くではなく、適かに、江戸の市河米庵、巻菱湖の下にあつた。今、三者を比べて見て、どうして海屋の盛名がこの二者の下にあつたかを不思議に思はざるを得ない。米庵巻菱湖共に門下の

諸侯前後二百に及び一殿士に至つては何れも五六千を數ふべしといふが、海屋は生涯を乏しくし、晩年京の加茂神社に奉仕してやゝ生計の安定を得たが、尙ほまだ家政豊かとは行かなかつた。

二

貴谷海屋の親戚のものが、海屋八十五歳の時、どうぞ片身に繪を一枚描いて下さいといつた。海屋は苦笑して、秘の繪などは實はい加減なものかも知れないのだ、しかし秘は書の道を究めるに殆んど生涯の心血を注いで來たし、これならば秘の死後あの人の片身だと云はれても恥しくないものが出来るかも知れないのである。それを、身近かのあなた迄

然るに今日となつて、米庵の書の市價はやゝあるとしても巻菱湖に至つては、所謂二束三文の類に墮してゐるに反し、海屋はますます

高價を呼ぶに至つてゐる。書は何時の間にかやらぬきな(貴名)さん、子孫の爲めに田地かいおく(海屋)といふ落首によつて書家の間に海屋の死後を羨んだものがある。

敢てこの三者ばかりではなく、明治の書家に於ても、生前相當な盛名があつたものでも今日殆んど紙屑扱いを受けてゐるものが甚だ多い。學者儒者の物は別として、強いてやゝ書舖の店頭を飾るものを選べば中林樗牛位のもではないだらうか。

生きてゐる中は如何に盛んでも、死して後一人のかへり見るものもないとしたならば、人生餘りにも淋しいことではないか。書家はかりではない、書家も文士も同様である。

秘は書はわからない。が、巻菱湖のものは何んとなく俗臭漂ひ、ケレン澤山でどうにも嫌ひである。近世のものでは西川春洞も嫌いだ。この程ある人の話に、巻菱湖がかつて駿府に遊んだ事がある。旅館に泊つてゐるとそこへ後から一人の客が來て、宿の主人に、今日泊つてゐるのは何人かときいた。主人は、その巻菱湖先生である旨を答へるとその客は、あゝあの饒字を作る人置かといつた。それを

夢湖がきいて、慨然として、假字を假るとは何事かとくつてかゝつた。ところが對手は堂々と書道を説き、考證精確、引例豊富で、夢湖は歯も立たなかつたといふ。それやこれやを思ひ合せ、ます／＼夢湖が嫌ひになつた。

三

吾竹は晩年、もう研究すべきものもなくなつて行詰つてゐる時に、ふとした機會で刀の銘を見たことがある。刀屋は實に心血をそゝいで刀を鍛つ、そしてこれでいゝといふ時にはじめて銘を入れるのである。その時の氣持といふものは、たゞ出来上つた自分のものへ自分の名を入れるといふ、たゞそれだけの儼然なものでは決してないのである。一刀の鍛ひは實に苦しいものである。それが出来たといふ喜びと共に、その刀に對する非常な自信と誇をもつてはじめて銘を入れるのである。その時のうれしさが忘れられないので、自分は壽命を縮めて、今日迄刀をうつてゐると、私の知つてゐる老刀匠が語つたことがある。それだけに、刀の銘には不思議な魅力もあり、迫力もあるものである。だからこそ偽物は

凡そ銘を見ただけで、びーんと來るのである。如何に巧みに眞似てはつて見たところで彫るものに感激もなければ、誇もない。見たものに迫る力のないのは當然のことであらう。

吾竹のはじめて見た銘は、何んといふ刀であつたか知らないが、書としてみても、實にいゝものゝある事は事實で、吾竹はこれに傾倒して研究して行つた。書の中から私でさへ、最近に見た兼房といふ刀の銘の文字は深い印象を残し、遂に鑑を厚くしてその刀を護つて貰つた程である。刀の出来はそれ程でもないが、銘だけは實に立派なものである。吾竹の刀銘研究は次第に熱中し、かつて仙臺に遊んで、刀屋の店頭で、これを見てゐる中に、あれも欲しくなり、これも欲しくなり遂に澤山買入れて終つた爲めに、さて仙臺出發といふ時になつて、數十口の刀は残つたが銘が一文も無く、宿屋の支拂も出来なくなつて、警察署長の好意によつて辛じて出發したといふ話がある。

四

しかし考へて見ると、書といふものも只文字を書くといふだけでは、いくら書いて見たところで知れてゐるようである。何にかその書へ骨をつけるようながつちりとした力の強い研究が加はらなくては大成しないようである。私は餘り好きではないが山岡鐵舟の書はその劍法の脱胎だ。高麗泥舟に至つては、その擒腕の自得より來ると共に、性格上の一顰の頑固さが顯現してゐる。勝海舟は性格そのまゝの字で、いつも熊の皮の上へ紙を展べては書くので、どうも筆痕に凸凹が出来、時には筆力が滲滲する事さへある。ある人が、先生は文字は入皆貴重して千歳に傳へます。僕はくは鐵にかへられん事を願ひますといつたところが、海舟色をなして「おれは、書以て天下に傳へるものぢやあねえ」と云つたといふ。如何にもその通りの字である。鐵舟はかつてある人が、あなたは眞末に於て鐵王の大義をとへ乍ら、今は一介の頑民として、朝に仕へないことを、むしろ高尚のやうに思つてゐられるようだが、間違つてはゐないだらうか、と説きかけた時に、平然として、鐵にもあらぬ此身は泥の舟、乗り出さ

ぬがかち／＼の山と詠んでこれに酬へたといふ。その邊の呼吸が、書の上に隱然たるものがある。

鐵舟に至つては、私は少し技が鼻につくのである。或人に語つて、はじめは鐵劍をして字を書く手は、書けなかつたが日々これを勤めてゐる中に、今では何んでもなくなつた、おれは鐵法を書に施し、刀を奪ふの力で筆を振ふ事が出来るようになった、と云つたと云ふ。そんなものがやつぱり字の上に見えて、どうも、あつさりしない。

五

池大雅の字は秘も好きである。京の東山稻荷の幅五反の大帳の字といふのをまだ見ないが、これは機會があつたら是非見たいものだと思つてゐる。あれは大雅が、その大帳へ先づ最初の一字を書いておいてから、世話人に揮毫料はいかほど下さるかときいた。落語の浮世床ではないが、とにかく手をつけられて終つてからの交渉では對手の望みに任せるより外に法はない。大雅は即金で百兩呉れといふ。承知をすると、見事に書き終へて、その

百兩をふところ、早々何處かへ行つて終つた。後で、聞くところによるとは大違ひだ、大雅は人は金銭などに少しもこだはらない高潔淡泊な人だときいてゐたが。何んといふ下卑た男だらう、あんな男の書いたものなどは神前に愚多、いつそ引裂いて終はふかなど、話してゐるところへ、その大雅がまた元氣なくひよつこり戻つて来て、さつきの百兩はお返しするといふ。一同吃驚してゐると、實は骨董屋で古茶釜を見つけてそれがどうにもほしくて堪らない、百兩といふので、高いとは思ひ乍ら、それだけ頂戴したのだが、鐵劍乍ら行つて見ると、一步違ひにもうそれが賣れて終つて無かつた。無いとなれば不用な金であるお返しするといふのである。

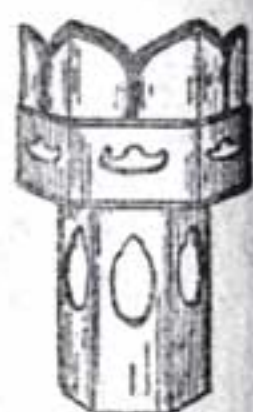
一同今更驚ろいて、その金を受取らない。この話が早くも八方に傳はつて、祭禮には大帳見物で人死が出来る程であつたといふが、大雅も、その人山の中に交つて知らぬ顔で帳を見てゐると、ある人が、如何にも見事な出来だが、字が少々曲つてゐるといつた。よく見ると如何にもその通りでありしかも一番下の字が少々だれてゐるのに氣がついた。

すぐにまた大帳を註文して、これへ書き直したが、どうも思ふように出来ない。書き直し書き直し、貰つた百兩どころか、二百兩の餘も金を使つて、やつとこれでいゝといふものが出来たといふことである。果して、その大帳が現存するならば、是非とも見たいものである。

人の風格はそのまゝ書へ出て来る。私がたゞ字だけを書いて見たところで仕方がない、先づ肚を作り、風格を生じ、それが筆端にほとばしり出なくては駄目だといふ所以である。

従つて、如何な達筆でも、人間そのもの、出来てゐない人の字は、決して何人にも快適を與へるものではないと思ふ。

弘法の書を見、大西郷の書を見て、その油っこい大俗の中に、一は一切衆生濟度の大事業に死決たる大熱意、一は日本國千萬年の將來に思をこらす大誠意、それを汲み取り得ざる人は無いであらう。字その物としては、果して天下最上のものかどうか、これは、その大熱意大誠意を汲み取り得るものと否とによつて、自から價值判斷に相違があらう。

信 仰
相 談九 品 差 別 と
座 像 立 像

(問)

一味平等絶對の極樂に上中下九品の差別ありと云はれますことが分りません。彼土にも等級があるのでせうか。この差別と平等とのわけを知りたいのですが、通俗的に腑に落ちるやうに御説明願ひます。

淨土宗の本尊様と眞宗の本尊様とは座像と立像との差であると云ふことですが、同じ阿彌陀様に救済方法が如何様に相違して居りますか。御尋ねいたします。

(太分・南海部・中浦・西川善彌)

(答)

佛教では單なる差別、戰なる平等は懸差別、懸平等と云つて悪い考へであるのみならず、さう云ふ事實が若し有るならば、それは人爲的な一時的現象であつて本當のものではない、本然の現はれとしては決してさう云ふことはあり得ないと見ます。

また絶對と云ふことも理論としては有り得ますが、現象としては有り得ないのです。既に極樂世界とは迷ひの世界、煩惱の世界、凡夫の世界たる娑婆世界と相違するもので、理論上「絶對」と考へられても、それは理論であり信念上のことであります。

實際の事實ではみな差別されて居るのであります。例へば杉苗松苗を作りましても同じ環境であり同じ親木から採つた種子であり同じ人手と同じ畑でありながら千態萬容實に寸分たがはぬと云ふやうなものとは絶對にありません。千人寄らうが萬人集らうが、人のおの顔が異なるやうに何もかも全然同じと云ふことはありません。このやうに世の中には全然同じと云ふものはありません。これ即ち差別の世界であります。然しながら松

たり杉たり人たるに於いては全く同じであります。また自然の恩恵を受ける量には多少の差はありませうが、それぞれの時處位に於いてその分を完ふすることは全く同じであります。即ち食物を受け、生命を受けて居る點では全く平等の姿です。即ち差別のまゝに平等であり平等のまゝに差別の相を現はして居るのです。若しそれを絶對と云ふならばこの「命」の點に於て誠に絶對であります。いきると云ふ一點に於て絶對でありま

す。茲に平等即差別差別即平等の實相があるのだと思ひます。いま極樂淨土の相に於て三輩九品の差別を示すのはそれ／＼機根が異なるからであります。然しながらこの九品九生の生は分段生と云つてからだの生死の問題として言ふところの「生」ではなく、原理的な「正しくいきること」の「變易生」の「生」であります。されば「生きる」事實に完全の姿とま

だ未完成の姿とあり、随つて菩薩に三賢十聖の差別もあるわけで、この差別があることに就いては毫も差支へはないと思ひます。然かも菩薩は菩薩であり「諸上善人俱會一處」するところそこに「平等」のすがたがあるのであります。或は淨土の生は「無生の生」であるから、三輩九品を説くけれども正しく往生した後は平等である

と云ふ説もありますが、それらは専門家の議論にまかせて、私達は平等即差別差別即平等の理に立つて眺めるのが一番よろしいと思ひます。次に座像と立像とで救済に相違があるかとお賀ねについて、眞宗の本尊様は大體立像ですが、淨土宗のは立像もあり座像もあります。立像は多くは來迎の姿であります。座像の方には說法相と定相と二種があります。何れでもよろしいでせう。救ひに異りはありません。(解答・中村壽康)



印度の 傳説 黒蛇物語

池田 因 基

ちはいつの頃からこうしてゐるのでせうか。これには古い傳説があります。黒蛇物語とでもいひませうか、このお寺の堂守が語る人達に話して聞かせる話はこゝろいふものなのです。

印度のある所に蛇寺といふ小さなお堂がありました。蛇寺を遠くからみると眞黒な一つのお堂にすぎませんが、近づいてよくみると誰でもがアツと驚いてしまひました。このお寺の御本尊さまを拝め机その他の諸道具から何から何までもが眞黒になつてゐるのですが、それといふのは幾千幾萬と数知れぬ黒い小蛇が鈴なりになつて俯ひ廻つてゐるからなのです。

まだお釋迦さまの御在世の頃、印度に黒蛇國といふ王國がありました。その國に黒蛇林と呼ばれる森林があつて、その面積は王國の三分の一を占めるといふ大きなものでしたが、森林の中には黒い蛇が鈴成りになつて住んでゐました。

黒蛇林の蛇たちは王國の政治がよくて國が治つてゐる時は温和しいのですが、若し政治が亂れたり、家來が悪かつたりすると、森林の中から續々出てきて王宮に入り込んだり悪い家來をこらしたりするのです。悪い國王が位につき、そ

の下に悪い家來が集まりました。更にその上人民たちが悪い事ばかりしました。すると何百萬と数知れぬ黒蛇が一齊に森林から出てきて都に入り込んできました。ために都大路はまるで黒い河が流れ始めたやうに見えました。その内に黒蛇は家の中にまで入つてくるし王宮にまで押しかけてきました。國民は非常に怖れ戦き、王宮では早速大會議を開きました。會議ではいろいろと相談が行はれ、その結果隣國から蛇食鳥といふ小鳥を澤山に買ふことに決めました。やが蛇食鳥が澤山にきて、黒蛇をそばから食べ始めました。しかしいくら蛇食鳥でも数知れぬ黒蛇のことですから、その内に食べ飽きてしまつてもう一匹の蛇も食べなくなりました。そればかりではなく、その鳥の糞からは黒蛇の卵が澤山に出てきました。こんなわけで黒蛇の數は一向に減りませんし、それどころか逆にますます多くなり、田や畑を荒し、家や王宮にどしどし

蛇たちは日が暮れるとゾロ／＼裏山に歸つてしまひ、また翌朝になると山から出てきて御本尊さまをおもひするのです。この不思議な蛇た

入り込んでくるのでした。國王や大臣たちは毎日毎日蛇退治の相談をしましたが、那によい考へも出ませんし、何うにも手がつきませんでした。

すると或る朝、お城の門前に見すばらしい一人の婆羅門僧が現れて、「わしが蛇退治をしてや

らう、がその代り黒蛇林を全部寄附してくれ」と申し出ました。

そこで國王はすぐ大臣たちと相談して婆羅門僧の申し出をそのまゝ承知しました。とに角このまゝでは國は亡びてしまふし、

大臣たちにもよい考へがなくて困り抜いてゐる時ですから、蛇さへ退治してくれれば黒蛇林を全部やると約束したのでした。

その翌朝、婆羅門僧が再び王城の門前に現れました。左手に

印を結び、右手に鈴を鳴らして、口は何やら呪文を唱へました。するとあちらこちらで暴れ廻つてゐた黒蛇たちが不思議さうに

一様に鎮静をあげ、鈴と呪文を聞いてゐました。そして婆羅門僧の方に引き寄せられるやうにして集まつてきました。やがて婆羅門僧



は黒蛇林の方へと靜かに歩みを進めました。その後からは何處と知れぬ黒蛇がそろ／＼續いてゆき、林の中へ入つてゆきました。林の中に入つた婆羅門僧は一本の梢に火を放ち、持った鈴を激しくふつて鳴らしました。火はみるみる内に燃がつて黒蛇林全部が火に覆はれ、火の林と

化してゆきました。すると何うでせう黒蛇たちはわれ勝ちにその火を目掛けて飛び込みました。

黒蛇林の火は三日三晩に亘つて續き、黒蛇はみな焼け死にました。四日目になつてザツと雨

が降つてきて、さうさの大火災も消えました。このやうにして黒蛇大森林は悉く焼けてしまひ、その跡からは青々とした五穀が生えてきました。

それから七日経つて例の婆羅門僧がまた城門の所に姿を現はし、「約束の通り黒蛇林の焼跡の土地を貰ひにきた」と申し出ました。國王や大臣達は約束はしたものの、さて黒蛇は一匹も居なくなり、焼跡はすっかり肥沃な畠となつて、五穀が熟してゐるのをみては、婆羅門僧にやるのが惜しくなつてしまひました。そこで國王は「約束は約束だが、森林の十分の一だけを與へよう」と返答しました。

すると婆羅門僧は國王をハツタとにらんで、こゝういひました。

「苦しい時の神頼みとはよくいつたものである。黒蛇の苦しみを除いてやれば悪かつたことに氣がついて改心すると思つてしてやつたことである。それが何んぞや、喉もと過ぎれば熱さを忘れるの道理の通り、國王も大臣も人民も先日までの苦しみを忘れてしまひ、悪心を改めようともしないではないか。わしに頼んだことも忘れてしまつて約束を守らうともしない。何れ忘恩の罪は受けずにはすまないであらう。その

時になつて後悔しても及ばぬことである。」
 こういひ終るとそのまゝ僧は姿を隠してしまひました。

何しろ見るからに乏しい一人の婆羅門僧のことであります。あの乞食坊主に何が出来たものかと馬鹿にして誰にも氣にかけられるものもなく平氣でゐました。國中では年踊りをして喜び騒いで三日の間それこそ狂ひ喜んでゐました。ところが四日目の朝、もう間もなく東の空には陽が昇らうとしてゐた時分、王城の前の廣場へ忽然として例の婆羅門僧が姿を現はしました。そして前と同じやうに左手に印を結び、右手に鈴を鳴らして何か呪文を唱へ始めました。

すると不思議にも街中の家々は自然に戸が開きました。家の中から五歳から十五歳までの男の子がまるで何かに誘はれたやうにして外に出てきました。この男の子たちは一人残らず王城の前の廣場に集つてきました。夢でもみてゐるのでせうか、うつとりとした目をして鈴を打ち振る婆羅門僧の周囲を取巻いて、しまひには皆靜かに踊つてゐました。しばらくすると婆羅門僧は除々に廣場を出てゆきました。城門を通りぬけました。やがて都の外を流れてゐる恒河といふ大きな河の方にと歩いてゆきました。子

供たちは嬉しさに僧の後から皆ついてゆきます。僧は恒河の岸に近づいてもそのまま歩き續けました。子供たちはわき目もふらずに僧の後に續いて歩いてゆきます。僧は腰のあたりまで水に浸りました。五六歳の子供たちはもう頭まで水に浸りました。僧の乳の邊まで水がきました。八九歳の子供の姿はもう見られなくなりました。一番大きな子供の頭がわづかに水の上に浮んで見えました。間もなく僧の兩肩まで水に浸し、遂に僧の頭も水の上には見られなくなりました。もはや恒河の水の面には渦巻く流れの外には何一つ見えなくなりました。

この王國は忘恩の罰として十年間、國の饑りとなる男の子が一人残らず恒河の底深く沈んでしまつたのです。國の王國ではこの様子をみてすぐに攻めてきました。黒蛇國がわけもなく征服されたことは申すまでもありません。

蛇寺の堂守がこう語り終つてからいつもつけ加へて旅人にこう云ふのでした。

「だから恩は決して忘れてはいけません。恩を忘れるものは必ず亡びてゆきます。お互ひに報恩に努め報恩に生きてこそ人の値打ちが出来るものです」

篤志寄附者芳名 (敬稱略)

左記の通り本會活動資金へと篤志寄附下されました。御芳志深謝いたします。

金 参 拾 圓

東京都本郷區弓町二ノ二二

木 下 利 吉

金 拾 五 圓

東京都芝區三田臺町一ノ四

武 藤 謙 象

金 拾 壹 圓 五 拾 錢

チチハル市南門外頭通町二號

米 津 百 松

金 拾 圓

東京都杉並區天沼三ノ七八七

高 橋 安 子

金 貳 圓

山口縣熊毛郡阿月村字和田一八三七

下 松 勝 滿

名 氏 所 住

壇歌



規定 官製ハガキにて編
鹿兒島縣 本村 益男

天地の恵みあまねし夫々と賜はるごとく五穀育ちぬ
へり下つた農人の誠實な氣持が現はれてゐる自らの手柄を云は
ず、つぎつぎと五穀のみのるのを天地のたまものと感謝してゐ
るこの素直さはありがたいものであると思ふ
静岡市 杉浦 敏夫

戦陣に生死を越えしまずらをか詠みたる歌はおほらかなるも
大言壯語 徒らに悲憤慷慨するばかりが愛國心でもなければ道
を得たものでもない苛烈な戦場にあつて生死を越えた勇士は、
却つてゆつたりしたおほらかな歌を詠んでゐるとその餘裕をほ
めたゝえた歌である
京都 澤井 茂雄

神風を願ふ心はみいくさの道にそむくと思はるゝかな
神風をたのんで自らの努力を作さざること勿れ、いくさの正道
は各々最善の努力をつくして最後まで頑張ることにある。天佑
をたのむ他力信心はすでに精神的に一步敗退したものだ。
京都 澤井 茂雄

数足らぬ飛機銃じつつ雲に散る勇士思へば病むはもどかし
鹿兒島縣 本村 櫻學
身にせまるおほみいくさの烈しさに眞向ひ居れば道は明らか
栃木縣 大輪 清

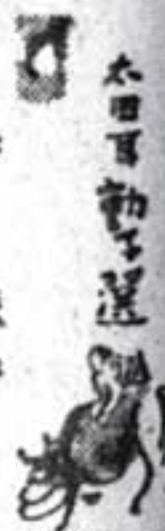
蓄積の花一輪活けて眺むれば心あかるき部屋となりけり
千葉縣 堀内 甲子雄
わが家にて作りし麦の重き穂をさくさくと刈る鎌のよき音
岩手縣 中村 秀

サイパンにうごめく敵のかげだにも止めず流せこの荒き雨
東京 押野 尚秀
草も木も哭きて眺へむつはものにつづきて散りしサイパンの婦女
名古屋 津玉 相

征きし子の手植のさくらこの日頃萎えしを見つづ物案じする
大分縣 西川 和子
勝ち抜かん獅子抜かん皆死なん今こそ沸きわれらの力
東京 上野 昌子

つつがなく歸りし君と語りたる夢の朝はうれしかりけれ
東京 上野 昌子

壇俳



規定 官製ハガキにて編
京都府 澤井 茂雄

この暑さに堪へて再起うたがはず
燕煤け障子にうつりけり
京都府 澤井 茂雄

明日もまた歸く幸や西雲
雲の峰染めん覺悟と子は申す
東京 山本 竹泉

壁に吊りて母子寮つゝましく
巢をかけてそゞろ心の燕啼く
静岡 杉浦 敏夫

短夜の風波を聴く枕かな
雨の果てゝぬるゝや春の雨
京都 堀内 甲子雄

そよそよと風にまかせて青田かな
空梅雨の雨を眺みて眠につく
京都 永田 七郎

燈籠のあかきに夢を拜みけり
蔵切の鳴き止みて只蘆と水
岡谷 久保田 穰

九十九段登れば院の葉鶏頭
用水や産蚊次々飛立てる
高知 竹原 敦圓

片時もたづは居ぬ老に喜雨きたる
仰向けに寝かす子供や夢を撥ぐ
高知 平野 雪女

眠びつゝ清水より起ち上りけり
戯木に夏行の僧の撫ひたる
名古屋 松橋 逸

除草機之音の消されて夏嵐
暑き日や父てづからの田舎そば
高知 竹原 敦圓

あみがさのそろふ田植やつばくらめ
あみがさのそろふ田植やつばくらめ
東京 篠原 金龍子

あみがさのそろふ田植やつばくらめ
あみがさのそろふ田植やつばくらめ
愛知 中村 一幸

中村 辨 康 著

新刊 信仰問答

賣價三圓十五錢

送料廿四錢

「浄土」創刊以來連載の「信仰相談」から主なもの約二百を選び系統的に配列しました。誰もが知りた
い難問疑義に對し明解を與へた興味深い活きた信仰
案内書です。問ふものの切度な悩みや疑ひに對して
親身に懇切に指導してゐます。

郁芳管長猊下名號御執筆

浄土宗日常勤行式

頒價八十五錢（送料共）

折本、縦五寸五分、横二寸五分

本文二號活字、總假名ツキ、特に一般信徒用として
編纂されたもの。

申込所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

編輯後記

◇吉田絃二郎先生は相變らず御元氣にて御奮闘されてゐますが、先生
の一日一日はしつかり嘯みしめられた日常なので、渾身の力がこめられ、自づと眞剣さの感ぜられるのに敬服の外ありません。
◇かの大震災は一回限りの災害でした。今や數限りない災害が警告されてゐます。防空壕の改裝が直ちに出來上つたのも當然でありませう。「子供を疎開させて親の氣持が確固不拔となつた」と友人が語つてゐました。
◇しかし英國にしる獨國にしる、現に日夜の區別なく連日試験に附へつつあります。
◇英靈の頭蓋骨を子供の玩具に興へる吸血鬼が相手ですから、われ等としてもその覺悟が要ります。
◇英靈の骨を削つて机上を飾る蠻人ですから、たた總力を擧げて彼等を撃滅するより途はありません。

浄土 九月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和九年八月十日印刷納本
昭和九年九月一日發行

（定價十二錢）

東京都芝區芝公園十五號明照會館
編輯兼發行人 眞野 正順

東京三芝區芝公園十五號明照會館
印刷人 赤尾 光雄

東京都牛込區市谷加賀町一ノ二二
（東京二）

印刷所 大日本印刷株式會社

配給元

東京都神田區渡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番
會員番號二三〇〇〇七

「浄土」購讀規定

定價 金十二錢

（送料二錢）

會費 金一圓六十八錢

（送料共）

振替掛込みはすべて本館のことに